

# 春信の肉筆畫

藤 懸 靜 也

版畫家としての春信の特色は、既に世に顯はされてゐる。然し如何なる肉筆畫を作つたであらうかは未だ明かにされない。然かも明かなどいふ程度でなく、春信の肉筆畫の存在が問題となつた程である。

然かるに、昨年初夏男爵三井高陽氏邸に於て、はからずも春信の肉筆畫二點を展覧するの機會を得た。その時所長矢代幸雄氏もその場に居られたのであるが、男爵家の多くの家寶類を拜見しての後のことである。男爵は私に見せるものがあるとして、多くの扇面の地紙と共に出されたのが、本號所載の春信の肉筆美人圖二點である。これは一見してまがふかたなき春信の眞蹟と鑒せらるゝものである。

これまで春信の肉筆畫と稱せらるゝものを幾つか見た。然しこの扇面の美人圖の如く、春信の版畫に於ける特色と同一なる肉筆畫を見ることがない。尤も春信の肉筆畫の偽作は版畫によつて作るものが多いので、版畫のやうな肉筆畫となるのではあるが、やはり偽作は偽作で、判別され、本圖のやうなものではない。

元來春信は版畫家であるから、本圖にも版畫的特色を認めることができるとしても、その手法は版畫に於けるものとは違ふものであり、肉筆畫にも堪能な手腕をもつことが容易に首肯できる。

この扇面の美人圖は、肉筆畫として細心の注意を以て畫いたもので、見ればみる程細かく、畫技に熟したものであり、版畫とは異なる表現の法を取つてゐるのである。

余はこの繪を見た時、非常な興味をもち、版畫家たる春信の肉筆畫として、世に珍らしきものなる旨を矢代氏に述べたので、遂にこの繪を本誌に紹介するやうにとの依頼を受けるに至つたのである。

そこで執筆するには更に見直す必要を感じ、十二月二日と九日との二回、精細に見たのである。それについては、三井男爵の御好意を深謝し、また菅沼貞三、正木篤三兩氏にも厚く感謝する次第である。

この扇面美人圖二點中、一圖は簪を差しながら時計を見かへる所であり、一圖は行燈の下に文を見る姿である。而してこの二圖は一對の扇として畫かれ、一は行燈に夜を表はし、他はそれに對して畫

間を意味するのである。然かも時計を見る女のうかけの文様には、柳に流水を以てして春を示し、他の美人の着物には、菊花の模様を付して秋をあらはし、なほ燈下に夜長をも偲ばせる図様である。この二圖は描寫に細巧を盡したもので、濃麗な賦彩を以てしたのであるから、寫真だけではこの繪の面白みを十分に鑒賞するには足りない。されば茲にこの繪の色彩をも説明し、その特色を述べやうと思ふ。

この繪はもと扇面に仕立てられてゐたのを、骨から離したのである。それ故繪に折り目があり、骨のついてゐた跡がある。時計を見る女の繪は、十八折で、扇の上部の最大の幅が三九、五センチ、下部の幅は一六センチであり、扇面の豎の線は一三、八センチある。行燈のある圖は、二十二折で、扇の上部の最大の幅は四三センチ、下部は一七センチ、扇面の豎の線は一三、七センチある。

次にこの繪の色彩を點検するに、美人は二圖共に、顔面を肉色とし、胡粉に多少燕脂を加へた顔料で塗つて居る。時計を見る女は黒い着物を著けてゐるやうに見えるけれども、打ちかけは鶯茶に鼠色をかけたやうな色で、それに群青を以て柳を寫し、流水には白緑を用ひた。而して柳にも水にも銀泥を使用してゐる。着物は朱に燕脂を加へたやうな色で、然かもやゝ古色を帯びてゐるが、なほ極めて鮮かで、それに裾模様として、木賊と思はるゝやうな草を金泥で畫いてゐる。而して着物に用ひられた描線に沿ふて恰も書き起しのやうに、金泥の線を用ひてゐる。襦袢の襟は朱で、下着は淡藍の具を

以てし、しごきにも亦淡藍の具を塗り、銀泥の線で書き起しをしてゐる。

文を見る美人の着物は、淡藍の具で水色をあらはし、それに菊花の模様を付してゐるが、菊の莖は金泥で畫き、葉は銀泥であらはしてゐる。帯は鶯茶に鼠色をかけた色で、下着と袖裏、裾まはしには朱を以てし、美人の頭髮と行燈の臺とは焦墨で、全體の色調を整へてゐる。而して、衣文の線を初めとし、行燈に用ひられた線や、美人の見入つてゐる手紙の臨劃の線に至るまで、金泥或は銀泥の線で書き起しをなし、或は覆輪をとつてゐる。實に細心の注意を以て畫いてゐるのである。相貌の描寫にしても、眉と眼とは焦墨を以てして、鼻や耳や頬の線は黒ずんだ俗赭を用ひて肉色をあらはさんとしてゐる。また團扇に畫かれた松並木には銀泥を用ひており、行燈の如き更に細かな描寫である。まづ焦墨で行燈の形を寫し、金泥の線で覆輪をとり、紙をあらはさんとして胡粉を塗り、油の皿には紫褐色を用ひ、焰は朱であらはし、油の浸みた燈心、受け皿、金具等は細を穿つて金泥で畫き、驚いた細密振を發揮したのである。

この二圖には共に春信畫と署名があり、その下に白字春信の印章が押されてゐる。而して署名印章の上にも少しも疑問を挿むべき點なく、春信の肉筆畫の標本として、最も貴重なものと考へられる。然らばこの繪は春信のいつ頃の作であらうかといふ問題が残るのであるが、その畫風の上からいへば、春信が版畫に名聲を博した時代のもので、正に版畫に精力を集中してゐた時期のものと思はれる。

藏氏陽高井三 爵男 京東

(寸原) 圖 人 美 筆信春

藏氏陽高井三 爵男 京東

(寸原) 圖 人 美 筆信春

何となれば、この肉筆畫が春信の明和年間に於ける傑作の版畫と、その特色を同うするものがあるからである。三井男爵家にはこの春信の肉筆畫以外になほ多數の春信の版畫がある。その内に中判で寒山拾得見立圖に中納言朝忠の歌を題したものがあり、その寒山見立の女の着物に木賊の如き模様が裾に付せられてゐるが、それが本圖の時計を見る女に付せられた模様と、同一性質のものである。恐らくこの肉筆畫とこの寒山見立圖とは、相近い時に畫かれたものであらうと思はれる。また署名の書態からみても、兩者は非常によく相似たものであることを思ふ時、益々兩者の深い關係にあるべきことを疑はない。

春信の歿年に就ては正確とはいへないまでも、明和七年に四十七歳で俄かに病死したといはれてゐる。而して春信の版畫中に、明和七年と明記された小判十二ヶ月圖がある。この圖は珍らしいものであるが、同じく三井男爵家に所藏されてゐる。一枚に長方形のものと稍方形のものとの二圖を収めた十二枚揃であるが、その十二月の分に、恵比壽が年末の計算をしてゐる圖で、その大福帳に明和七年とあるのである。これは前年六年中に畫いたものであるかも知れないが、春信の最晩年の作として貴重な資料といふべきものである。これと本圖とを比較すると、その特色は頗る相近いのであるが、必ずしも同年の作とも考へられず、それより少し前のものであらうと思はれる。而して春信の繪曆に徴し、明和二年三年の美人圖と比較すると、それよりもやゝ後のものと考へられ、前述の寒山拾得見立

圖に酷似することから考へて、この肉筆畫の製作年代を推定すれば、まづ明和四五年頃のものであらうと思はれる。要するに春信は明和の初めより版畫に全力を注ぎ、忽ちの内に多數の版畫禮讀者を得て、愈自己の版畫藝術を高上せしめた時、會々肉筆畫に筆を染めて、色彩の效果に於ては版畫の特色を追ひ、物象の描寫に至りては、版畫に表はせない細密な手法を以てし、肉筆畫としての長所を十分に發揮したのであらう。かくて肉筆畫に版畫の效果的なる特色をも加へたのであらう。さればこの二圖は何れも色彩の種類が少い、言ひかへれば畫面の色を單簡化してゐるのである。

春信の美人畫は多くの版畫でみると、姿態の美化に努め、幻のやうな美的氣分の中に理想化し、悠々迫らざるものがある。従つて夢のやうな世界に遊ばせようとする解放的な自由さが漲つてゐる。この特色は本圖に徴しても同様のことが考へられるが、本圖の美人は殊に細密な描寫をしてゐる爲めに、頗る現實的な氣分が多く味はれ、春信の美人畫としても亦異色あるものである。吾人は茲に春信の肉筆畫として、的確なるものと思考せらるゝ二圖を紹介したことが、遺作の極めて少い春信肉筆畫の研究に重要な資料となれば、余の最も欣幸とする所であり、余も亦春信の肉筆畫に就て更に考究しやうと思ふ。